

府内城・城下町

－知事公舎建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2019

大分県立埋蔵文化財センター

府内城・城下町

－知事公舎建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県総務部県有財産経営室の依頼を受けて実施した知事公舎建替事業に伴う府内城・城下町の発掘調査報告書です。

府内城は慶長2年（1597）に福原直高によって築城が始められ、その後、竹中重利が慶長6年（1601）に入部し、城郭の主要施設と城下町の整備が行われました。

今回の調査地は、平成6年度に発掘調査を実施した三ノ丸北口跡の東に位置し、中堀の中央部にあたります。発掘調査では、中堀の底を確認し、その深さを明らかにでき、出土品から埋没年代についても手がかりを得ることができました。小規模な調査のため堀の全体は明らかにできませんでしたが、府内城の解明にはこうした調査の積み重ねが重要であると考えます。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発の一助として活用されれば幸いです。最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成31年3月29日

大分県立埋蔵文化財センター

所 長 江 田 豊

例 言

1. 本書は平成29年度に実施した、大分県大分市荷揚町に所在する府内城・城下町の発掘調査報告書である。
2. 調査は知事公舎建替事業の実施に伴い、大分県総務部県有財産経営室の依頼を受けて大分県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本調査は平成30年2月9日～2月28日にかけて実施したもので、府内城・城下町の第30次の調査となる。
4. 現地での写真撮影や遺構実測等の記録作成作業は大分県立埋蔵文化財センターの土谷崇夫・園田涼太・横澤 慈が行った。
5. 出土品の遺物洗浄、注記、接合、実測、遺物写真撮影、トレース等の整理作業は平成30年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託した。報告書作成業務は平成30年度に実施した。上記委託業務以外の遺構・遺物図版の作成は土谷が行った。
6. 出土遺物及び写真・実測図等の調査記録は大分県立埋蔵文化財センター（大分市牧緑町1番61号）で保管している。
7. 図中で示した方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。
8. 本書の執筆・編集は土谷が行った。

目 次

序文
例言

第1章 調査の経過と概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織の構成	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 発掘調査の成果	6
第1節 調査の概要	6
第2節 調査区の層序	7
第3節 出土遺物	7
第4章 総括	12

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	府内城・城下町位置図	1
第2図	調査区位置図	5
第3図	調査区配置図	6
第4図	府内城・城下町中堀調査平面図	6
第5図	調査区西側壁土層断面図	7
第6図	6層出土遺物実測図	9
第7図	6・7層出土遺物実測図	10
第8図	排土・攪乱出土遺物実測図	11

表目次

第1表	遺物観察表（土製品）	12
第2表	遺物観察表（土器）	12

写真図版

写真図版1	府内城・城下町中堀遠景（西から）	15
	府内城・城下町中堀近景（西から）	15
写真図版2	西側壁土層断面（東から）	16
	作業風景（西から）	16
写真図版3	出土遺物（第6図1～第6図4）	17
写真図版4	出土遺物（第7図5～第7図9）	18
写真図版5	出土遺物（第8図10～第8図13）	19

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経緯

県有財産経営室から、平成29年11月2日付けで知事公舎建替事業に係る埋蔵文化財確認調査の依頼があり、確認調査の実施計画書を11月28日付けで回答した。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「府内城・城下町」に含まれており、府内城の堀の中央部に位置し、遺跡の存在が予想された。12月7日に確認調査を行い、第1層の盛土、第2層の褐色砂質土を経て、堀の埋土である第3層の灰色粘質土、第4層の灰色砂質土の地山に至ることが分かった。3層下部から近世の播鉢と瓦が出土した。知事公舎建屋は玄関ポーチを含めると370㎡の面積になり、柱状改良を5mないし12mの深さまで行うことから、遺跡に影響を与える十分な深さであり、玄関ポーチを含めた建屋を本調査することとなった。



第1図 府内城・城下町位置図 (S=1/25000)

第2節 調査の経過

1 発掘作業の経過

知事公舎建替に伴う発掘調査は、平成29年12月8日付けで県有財産経営室から本調査の依頼を受けて実施した。発掘調査の実施にあたり、発掘作業や記録図化作業、労務管理や現場管理等を支援業務として民間調査組織に委託することとし、2度の入札を執行したが、いずれも入札不調となり、工期の関係上支援業務委託は断念せざるを得なくなった。そのため関係機関とも調整のうえ、測量基準点設置及び県調査員の指示のもとに遺跡の人力掘削を行う発掘作業をそれぞれ委託し、それ以外の業務は直営で実施した。

現地作業は平成30年2月9日から重機による表土等の掘削を開始した。重機掘削は確認調査での所見を踏まえ、近代以降の堆積層（4層）まで掘り下げ、近世堆積層を人力で掘削した。堀底に近くなるほど湧水が著しく、水中ポンプを使用した排水作業を行いながらの掘削作業となった。また、掘削深度が3.4m以上になることから、壁面の崩壊防止のため、傾斜角をつけながら掘削を行った。人力掘削は2月21日から2月26日まで行い、2月26日には調査区の全景写真撮影を実施した。2月27日には埋戻しを開始し、翌28日の埋戻し終了、調査機材の撤収により現地調査を完了した。

調査終了後、平成30年3月1日付で大分中央警察署長あて埋蔵文化財発見通知を提出するとともに、県教育庁文化課及び県有財産経営室へ本調査の終了を通知した。以上をもって、本業務を完了した。

2 整理作業の経過

整理作業及び報告書作成作業を平成30年度に実施した。整理作業は基本作業と資料作成業務を一括して委託し、埋蔵文化財センター整理棟を作業場所として実施した。委託内容は出土遺物の水洗、出土地点の注記、遺物接合、遺物復元の前半工程と、遺物実測、遺物観察基礎データ作成、遺物実測図のトレース及び遺物区分けや収納等諸作業である。作業工程ごとに調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。整理作業は平成30年4月10日から平成30年8月31日に遺物洗浄から遺物実測図トレース・遺物写真撮影までの各作業を行った。

第3節 調査組織の構成

発掘調査時の組織は以下のとおりである。

(平成29年度発掘調査)

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	大分県立埋蔵文化財センター	所長	阿部辰也
	同	副所長兼調査第一課長	江田 豊
調査事務	同	総務課長	神田 繁
調査第一課	同	主事（調査担当）	土谷崇夫
調査第二課	同	主事（調査担当）	園田涼太（国東市から派遣）

(平成30年度整理作業)

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	大分県立埋蔵文化財センター	所長	江田 豊
	同	参事兼調査第一課長	友岡信彦
調査事務	同	副所長兼総務課長	森次正浩
整理事務	同	調査第二課長	吉田 寛
調査第一課	同	主事（報告書担当）	土谷崇夫

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大分平野は九州北東部に立地し、北側は別府湾に面し、その東側に佐賀関半島が位置する。地質的には平野内
部は新生代第三紀中新世から第四紀の地層である豊州累層群が広く分布している。平野の中央部は大野川が、西
部には大分川が別府湾に注ぎ込んでいる。この二つの河川は流域に上野台地や鶴崎台地などの河岸段丘を発達さ
せ、河口部周辺には微高地が点在する。

今回調査を実施した府内城・城下町は、大分川の左岸にあり、河川によって形成された微高地上に位置する。
府内城の北側は江戸時代には、海に面しており、京泊といわれる港湾施設が城下町の北西に存在していた。現在
の景観は、埋め立てなどの要因で、当時の状況とは大いに異なる。しかしながら町割りに関しては、千代町・大
手町・長浜町付近は往時の姿を今にとどめている。

第2節 歴史的環境

府内城・城下町周辺の大分川下流左岸の沖積地及び上野台地については、旧石器時代・縄文時代の良好な遺跡
は確認されていない。ただ府内城・城下町跡の整地層から二次的な移動で縄文時代後晩期の土器が出土すること
があることから、当該時期の遺跡が存在する可能性もある。

弥生時代・古墳時代では良好な遺跡が確認されている。東田室遺跡では弥生時代前期末と古墳時代前期の遺構
が主体となり、集落を区画する古墳時代前期の溝も検出されている。下郡遺跡群は弥生時代中期から後期にかけ
ての住居跡・貯蔵穴・土坑・ピット群など検出され、木製品も多く出土している。東大道遺跡B地区では弥生時
代後期前半の土坑が発見され、後漢鏡が出土している。若宮八幡遺跡では、弥生時代・古墳時代の住居跡・溝な
どが確認されている。上野遺跡群では弥生時代中期の集落を区画するV字状の溝や住居跡・貯蔵穴・方形周溝墓
などが確認されている。特に方形周溝墓の溝からは祭祀用の弥生土器が出土している。

奈良時代・平安時代では、役所関係の遺跡が確認されており、残りも良好である。羽室井戸遺跡では7世紀後
半から8世紀初頭の掘立柱建物や柵列などが検出されており、役所関連の遺構である可能性が高い。園遺跡でも
詳細な時期は確定できないが、掘立柱建物や倉庫跡が検出されている。竜王畑遺跡は7世紀後半から10世紀代に
かけての大規模建物群が検出され、国司館の一部であった可能性が指摘されている。

鎌倉時代になると、13世紀に、大友氏が関東から下向して豊後を支配する。大友氏の初期の守護所については、
大分市顕徳町の大友氏館跡あるいは上野台地に位置する上原館跡が想定される。

室町時代では、大友氏館跡は16世紀後半代を最盛期として、15世紀前半代までの整地層・遺構群が確認されて
いるが、13世紀代に遡る遺構は検出されていない。戦国時代の遺跡は、大友氏館跡と中世大友府内跡が継続して
調査がされている。2町四方の規模を有する大友氏の戦国期館跡や大規模な庭園遺構が検出されている。また大
友氏館跡正面の大路沿いに町屋が展開していることが確認されている。

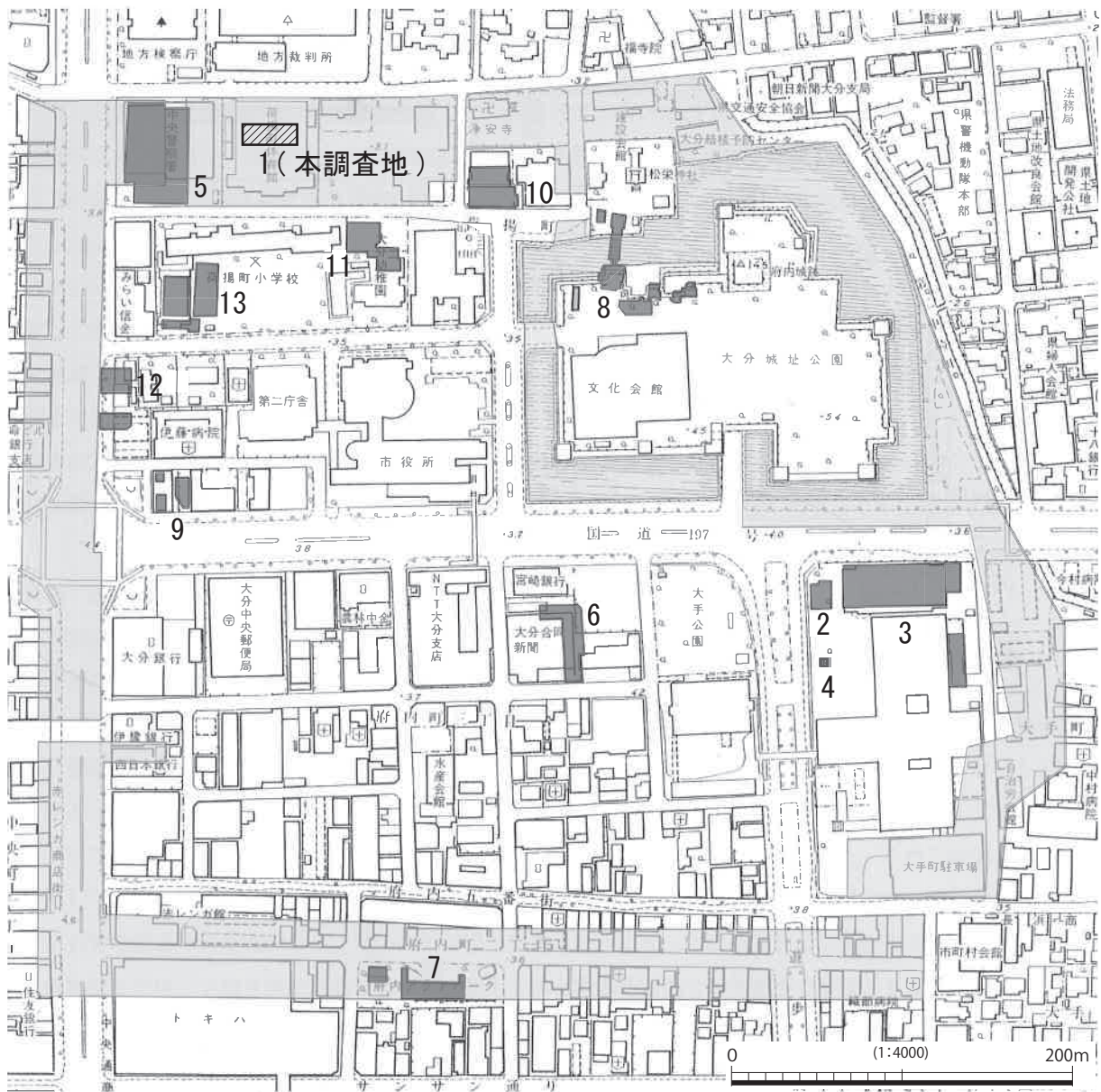
戦国末期になると、慶長2年（1597）に福原直高によって府内城の築城が進められる。慶長4年（1599）には
二ノ丸東三重櫓と三ノ丸家臣団屋敷を造営している。その後入封した竹中重利の時に、ほぼ城下町を含めた主要
施設である天守閣・櫓・門・三ノ丸の中堀・山里丸および三ノ丸に入る東西の入口を完成させ、三ノ丸外側を囲
む形で町割りを敷き、町民を移住させている。慶長10年（1605）には外堀を完成させ、慶長12年（1607）に城下
への入口を3箇所設けている。翌年（1608）には城下の北西部に京泊と命々された舟入を作り、城下町は一応の
完成をみた。府内城・城下町は門内の47町と門外の5町を合わせた52町が成立し、都市として機能した。

江戸時代の府内城・城下町では、平成6年度に大分県教育委員会により大分中央警察署庁舎新築工事に伴う発
掘調査が実施され、三ノ丸北口が検出された。この調査では、三ノ丸北口が当初実戦の出撃に有利な外柵形虎口

として構築されたが、次の段階で二重櫓台の構築によって防御に有利な内枳形虎口的な空間になり、最終的に虎口空間に存在する施設を増築していることが分かっている。この拡充により、城門の荘厳化を図ったことが指摘されている。平成17年度には大分市教育委員会により大分市保健所建設に伴う発掘調査が実施された。府内城築城当初に遡る可能性のある石垣が多く確認され、特に裏込めの埋土中からは胎土目段階の肥前陶器だけが出土していることから、この時期に造られたと考えられている。平成18年度には大分市教育委員会により市営荷揚町中央駐車場建設に伴う発掘調査が行われ、江戸後半期の東西溝、区画杭の存在が確認された。このことから調査区の西側に推定される屋敷地、南側の屋敷地、東側の屋敷地で宅地割りが確認できた。これは復元図の正確さを考古学的に検証した結果となった。平成23年度に大分市教育委員会により大分市立荷揚町小学校屋内運動場改築工事に伴う発掘調査が実施された。19世紀の遺構から「手嶋」「上原」と記された焼継された陶磁器が出土した。これは19世紀に書かれた絵図と焼継された陶磁器の内容とおおむね一致していることが確認できた。

(参考文献)

- 大分県教育委員会1989『下郡桑苗遺跡』
- 大分県教育委員会1992『下郡桑苗遺跡Ⅱ』
- 大分県教育委員会1993『府内城三ノ丸遺跡』
- 大分県教育委員会1994『府内城三ノ丸遺跡Ⅱ』
- 大分県教育委員会1996『府内城三ノ丸北口跡』
- 大分県教育委員会2001『上野遺跡群大分上野丘高校地区』
- 大分県教育委員会2002『東大道遺跡（B地区）』
- 大分県教育委員会2006『上野町遺跡・顕徳寺遺跡』
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2005～2007『豊後府内』1～7
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2008『東田室遺跡』
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2016『府内城三ノ丸遺跡Ⅲ』
- 大分市教育委員会1992『園遺跡－都市計画道路古国府木ノ上線改良工事に伴う発掘調査報告書－』
- 大分市教育委員会1992「上野遺跡群」『大分市文化財年報3』
- 大分市教育委員会1990～1993『下郡遺跡群』
- 大分市教育委員会2002～2006『大友府内』4～8
- 大分市教育委員会2006『若宮八幡遺跡第1次調査』
- 大分市教育委員会2008『府内城・城下町5』
- 大分市教育委員会2009『府内城・城下町6』
- 大分市教育委員会2009『府内城・城下町7』
- 大分市教育委員会2012『府内城・城下町8』
- 大分市教育委員会2014『府内城・城下町10』
- 大分市史編さん委員会1995『大分市史』上巻
- 大分市史編さん委員会1987『大分市史』中巻
- 高橋信武1999「上野遺跡群竜王畑遺跡の発掘調査－豊後国府関連遺跡の発見」『大分県地方史』173号
- 王永光洋・坂本嘉弘2009『大友宗麟の戦国都市 豊後府内』新泉社
- 坪根伸也他1996「豊後国府推定地周辺の発掘調査Ⅱ－羽屋・井戸遺跡の調査から－」『大分県地方史』163号



番号	調査の内容	遺跡の概要	調査主体者
1	知事公舎建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	中堀	大分県教育委員会
2	大分県庁新館受変電棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷	大分県教育委員会
3	大分県共同庁舎（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷	大分県教育委員会
4	大分県共同庁舎前広場モニュメント建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷	大分県教育委員会
5	大分県中央警察署本部別館庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	堀・石垣・槽・三ノ丸北口	大分県教育委員会
6	民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷	大分市教育委員会
7	公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査	中堀	大分市教育委員会
8	公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査	西ノ丸・廊下橋、周辺建物	大分市教育委員会
9	民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷・浄安寺	大分市教育委員会
10	大分市保健所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	北ノ丸・堀	大分市教育委員会
11	市営荷揚町中央駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷	大分市教育委員会
12	民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷・道路	大分市教育委員会
13	大分市立荷揚町小学校屋内運動場改築に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷・道路	大分市教育委員会

第2図 調査区位置図(1/4000)

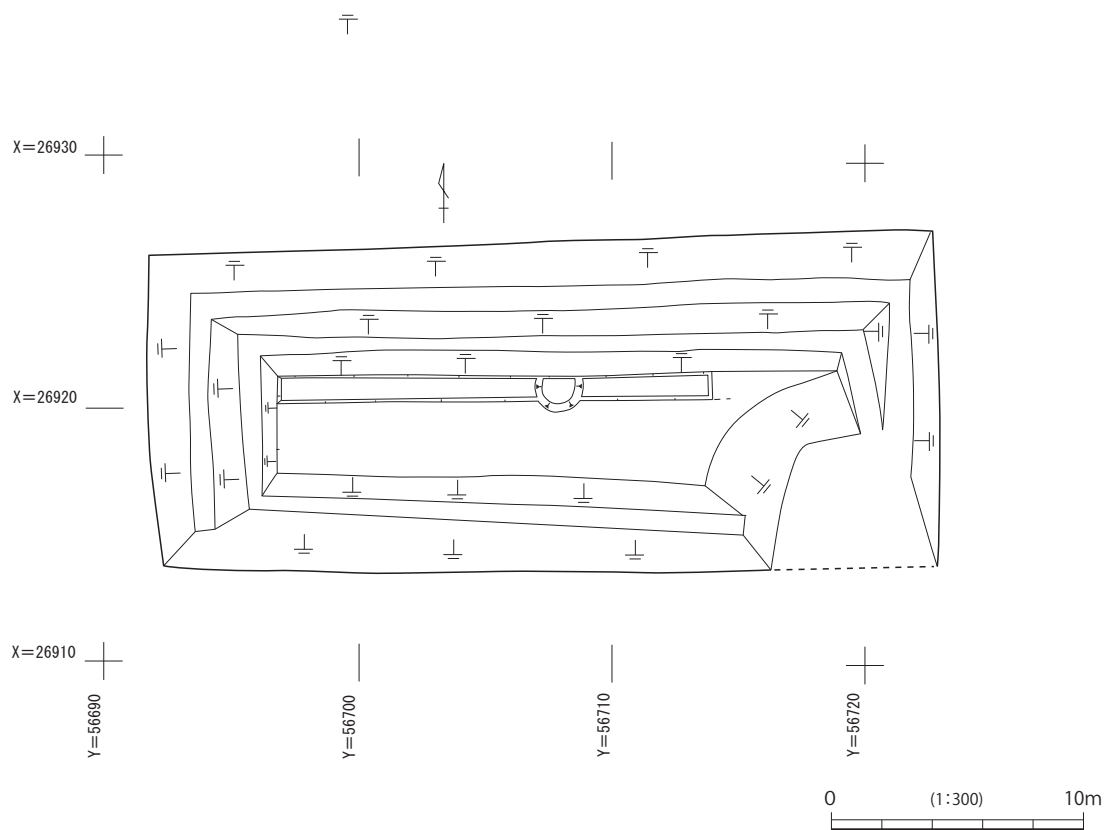
第3章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

調査地は、大分県立荷揚町体育館跡地である。昭和29年に開館した荷揚町体育館は、老朽化や大分県の行財政改革に伴い平成17年に閉館した。その後民間駐車場として利用されていた。当該地は府内城の北西部にある三ノ丸北口跡の東隣に位置する中堀跡である。調査面積は370㎡であった。調査では小規模ながら中堀の底を確認することができたが、石垣等は検出されなかった。出土した遺物の状況から近代以降に中堀は埋められたようである。



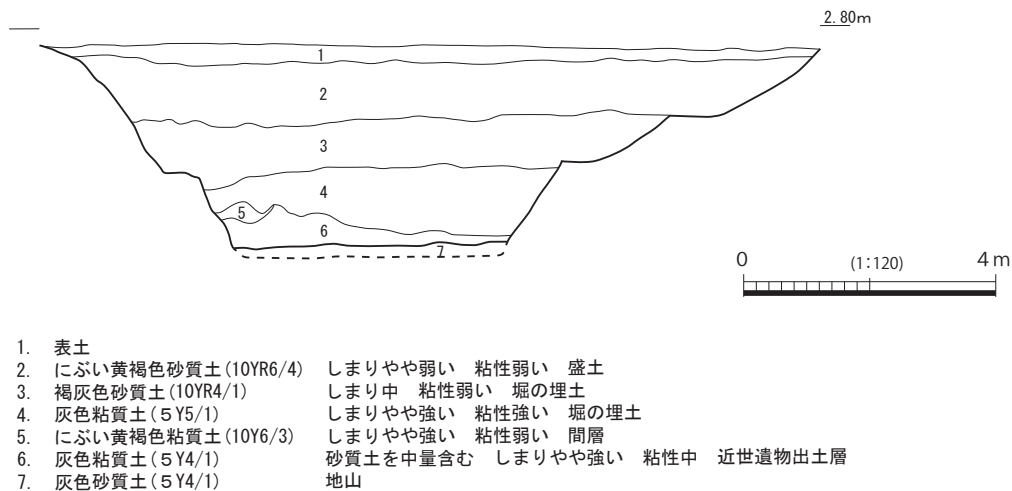
第3図 調査区配置図 (S=1/4000)



第4図 府内城・城下町中堀調査平面図 (S=1/300)

第2節 調査区の層序

堀の埋土は第1層が表土、第2層はにぶい黄褐色砂質土（10Y R 6 / 4）の盛土、第3層は褐灰色砂質土（10Y R 4 / 1）、第4層は灰色粘質土（5 Y 5 / 1）、第5層はにぶい黄橙色砂質土（10Y R 6 / 3）、第6層は灰色粘質土（5 Y 4 / 1）で砂質土を中量含み、第7層は灰色砂質土（5 Y 4 / 1）である。第3層から第6層までは堀の埋土であり、第7層は堀の底面で地山である。第3層と第4層は近世の遺物が見られるが、明治から近代の遺物を含むことから、中堀は近代に埋められた様子が窺える。第6層は近代の遺物は含まず、近世の遺物が出土している。第7層は灰色砂質土の地山層であり、この層の上面から縄文時代後期の深鉢と弥生時代前期の甕が出土している。



第5図 調査区西側壁土層断面図 (S=1/120)

第3節 出土遺物

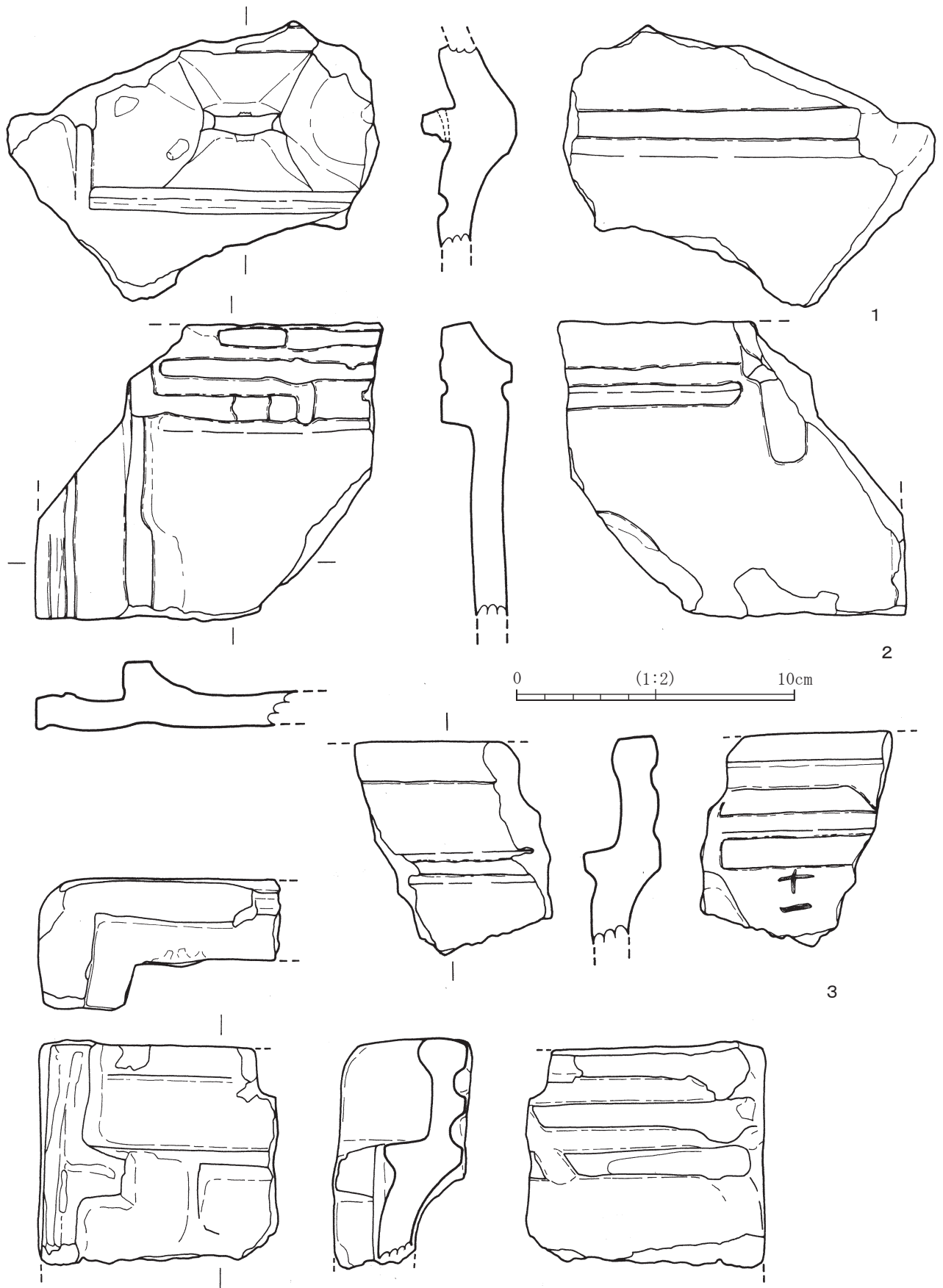
第6図-1～4は瓦質の遺物である。6層から出土している。1は、表面に突起があり、突起には上下に通じる穴が穿孔されている。また下端部には横方向で凹線状のものが施されている。裏面は横方向で線状のなだらかな突起がみられる。2は1とは違い、上部と左横の部分に角が残っている。断面をみると、平坦な部分があり、上部の表面には横方向で線状に突起がみられる。凹線が表面に2条、裏面に1条みられる。また表面の縦方向にも線状に突起がある。3は上部に角が残っている。表面には1条の線状で横方向の突起がみられる。裏面には突起が横方向に広がる面がみられ、凹線が2条ある。その下には「十一」と読める数字が施されている。4は表面の左側側面と上部には角が残っている。断面をみると、表面には横方向で線状の突起がみられる。裏面には突起が横方向に広がる面がみられ、凹線が2条ある。1～4については器種・用途については不明である。

第7図-5は染付磁器の端反碗である。19世紀前半のものである。薄く仕上げられており、花や枝葉が描かれている。6は信楽焼の搦鉢である。胎土には小さな白い粒の石がわずかに混じっている。内側には7条のすり目があり、外側はナデで仕上げられている。色調は内側が灰褐色、外側は褐色である。7は磁器で徳利の底部である。外側には釉薬が施され、内側は施されていない。底の豊付けは露胎である。色調は、表面が明緑灰色であり、裏面は灰黄色である。5～7は、江戸時代後半から末に比定される資料であり、いずれも6層からの資料である。このことから6層は江戸時代末頃に堆積した埋土であろう。

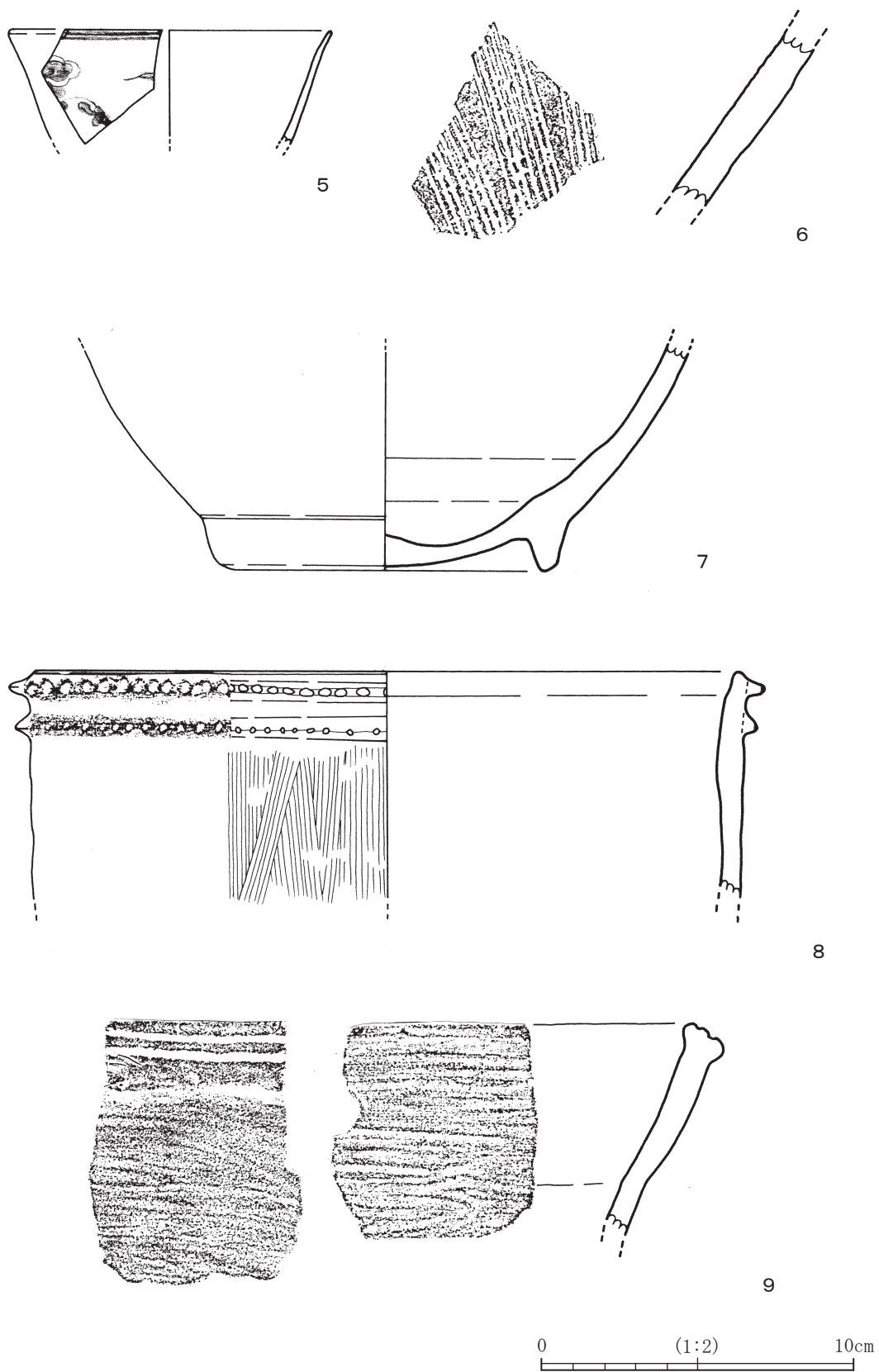
8・9は7層上面からの出土遺物である。8は弥生時代前期の下城式の甕である。口縁には刻目突帯が2条施されている。刻目は上部が大きく、下部は比較的小さく施されている。外面には縦方向に刷毛目が施されている。内面はナデである。9は縄文時代後期中葉の深鉢である。口縁部は肥厚しており、上部には2条の沈線が施されている。外面・内面とも横方向の条痕が施されている。口縁部はナデである。

第8図-10・11は近代以降の埋土からの出土である。10は明治期の磁器の皿である。口縁部はやや外側に外反する。高台は狭く比較的高い。内外面は釉薬が施されており、豊付けは露胎である。文様は型紙で施されており、様々な色で絵付けがされている。11も明治期の皿である。口縁は底部から丸く立ち上がる。高台はやや幅広で低い。内外面は釉薬が施されており、豊付けは露胎である。文様は型紙で施されている。10・11は近代の埋土から出土していることから、明治時代に中堀が埋められた様子が分かる。

12・13は攪乱からの出土である。12は、陶器で唐津焼である。高台は狭く造られており、釉薬は、底部が露胎であり、底部より上に施されている。色調は淡灰褐色である。内面の見込みに重ね焼きの胎土目の痕跡をみることが出来る。13は酸化コバルト顔料による型紙摺絵の染付磁器で明治初年の碗である。器形は胴部から丸く立ち上がる。見込みは蛇の目釉剥ぎを施す。文様はややにじんで不鮮明である。



第6图 6層出土遺物実測図



第7图 6·7层出土遗物实测图



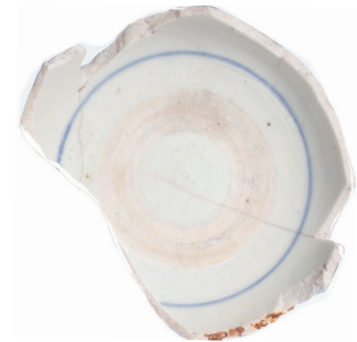
10



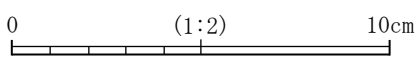
11



12



13



第8図 排土・攪乱出土遺物実測図

第4章 総括

調査地は、かつて発掘調査をした府内城の北西部にある三ノ丸北口跡の東隣に位置する中堀の中央付近である。今回の調査では石垣等の施設は検出されなかった。

この遺跡の年代的位置づけであるが、灰色砂質土の7層が中堀の地山層であることは、近世の遺物が出なくなることで分かる。また7層上面からは、縄文時代後期中葉の深鉢や弥生時代前期の甕が出土している。6層は中堀が存在していた江戸期に堆積した層である。そこから出土した端反碗やすり鉢の時期から判断した。5層より上で明治期の磁器が出土していることから、明治期から近代にかけて、中堀が埋められたことを示唆する。なお、6層から瓦質の遺物が出土しているが、用途不明の遺物であり、今後の類例を待つ。

第1表 遺物観察表（土製品）

挿図	遺物番号	種類	材質	寸法 (cm)						遺構名	備考
				縦幅	7.5+ a	横幅	13.0+ a	最大厚	3.4		
第6図	1	不明	瓦質	縦幅	7.5+ a	横幅	13.0+ a	最大厚	3.4	6層	縦孔あり
第6図	2	不明	瓦質	縦幅	10.5+ a	横幅	10.5+ a	最大厚	2.5	6層	
第6図	3	不明	瓦質	縦幅	7.5+ a	横幅	6.0+ a	最大厚	2.7	6層	数字の墨書あり
第6図	4	不明	瓦質	縦幅	8.0+ a	横幅	8.5+ a	最大厚	2.8	6層	

第2表 遺物観察表（土器）

挿図	番号	種類	器形	種別	法量 (cm) ()は復元径			遺構名	備考
					口径	器高	底径		
第7図	5	染付	碗	肥前	(10.2)	3.5+ a		6層	端反碗 (19世紀前半)
第7図	6	陶器	搦鉢	信楽		5.6+ a		6層 (確認調査)	近世
第7図	7	磁器	徳利			7.2+ a	9.8	6層	
第7図	8	弥生土器	甕		(22.2)	7.2+ a		7層	下城式土器 (弥生前期)
第7図	9	縄文土器	深鉢			6.7+ a		7層	縁帯文土器 (縄文後期中葉)
第8図	10	磁器	皿	肥前	13.0	3.7	4.5	排土	明治・型紙
第8図	11	磁器	皿	肥前	(11.0)	2.2	(6.4)	排土	明治・型紙
第8図	12	陶器	碗	唐津		1.3+ a	3.8	攪乱	17世紀初頭・見込みに胎土目あり
第8図	13	磁器	碗	肥前		3.9+ a	4.6	攪乱	明治・型紙、見込みに蛇の目釉剥ぎあり

图 版



府内城・城下町中堀遠景（西から）



府内城・城下町中堀近景（西から）



西側壁土層断面（東から）



作業風景（西から）



第6图1 (表)



第6图1 (裏)



第6图2 (表)



第6图2 (裏)



第6图3 (表)



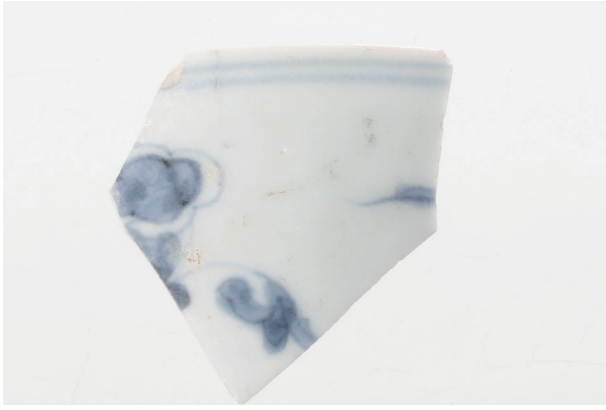
第6图3 (裏)



第6图4 (表)



第6图4 (裏)



第7图5 (表)



第7图6 (内)



第7图7



第7图8 (外)



第7图9 (外)



第7图9 (内)



第 8 图 11



第 8 图 10

第 8 图 12



第 8 图 13

第 8 图 13

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふないじょう・じょうかまち
書名	府内城・城下町
副書名	知事公舎建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第8集
編著者名	土谷崇夫
編集機関	大分県立埋蔵文化財センター
所在地	〒870-0152 大分市牧緑町1-61
発行年月日	2019（平成31）年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふないじょう じょうかまち 府内城・城下町	大分市荷揚町	44201	201041	33° 14' 28"	131° 36' 30"	2018. 2. 9 ～ 2018. 2. 28	370㎡	知事公舎 建替事業

所収遺跡名	種別	主な時代・遺構	主な遺物	特記事項
府内城・城下町	城下町	江戸時代堀	陶磁器・瓦質遺物・縄文土器・弥生土器	
要約	<p>調査地は、府内城三ノ丸北口跡の東隣に走る中堀を対象とした。石垣等は検出されなかった。</p> <p>近世の遺物は堀の基底面直上の層で主に出土し、その上層において明治期の磁器が出土していることから、近代以降に中堀が埋められたことを示唆する。</p>			

府内城・城下町

— 知事公舎建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発行年月日 平成31年 3月29日
編 集 大分県立埋蔵文化財センター
所 在 地 〒870-0152 大分市牧緑町1-61
TEL 097(552)0077
印 刷 極東印刷紙工株式会社
〒870-0844 大分市古国府146番地の3
TEL 097(543)3131
